

令和元年度(平成31年度) 学校評価 一教育調査の考察・令和2年度の取組・方向性・評価委員会の評価一

項目	対象	設 問	肯定的な割合 ()は否定的	考 察	令和2年度における具体的な取組・方向性	評価委員会の意見
学校生活全般	親	子どもの学校生活は、全体として満足できるものである。	91.8→92.8→88.5 (1.8→2.3)	肯定的な回答の割合、否定的な回答の割合とも若干の下向きの変化があった。学級経営、情報発信の課題分析とさらなる充実が必要である。	・学級経営の向上に関する情報を収集し配布・閲覧する。研修参加を奨励する。 ・学校便りをはじめできるだけ多くの情報を、紙ベースとホームページで積極的に発信する。	・肯定率が下がり、否定率が上がったのは真摯に受けてとめてほしい。 ・研修参加とその効果について明らかにすると良い。
一貫教育／異校種の協働	親	連携する小・中学校による小中一貫教育(小・中学校の教員による協働授業、児童・生徒の交流など地域活動への参加等)が進められている。	55.2→68.5→63.7 (6.1→7.1)	肯定的な回答の割合、否定的な回答の割合とも若干の下向きの変化があった。中瀬中との交流は試行錯誤の段階を過ぎ、継続可能な取組へ移行する時期に来ている。	・交流の実施(あいさつ運動、中学校見学・体験、出前授業、吹奏楽部演奏会、読み聞かせなど) ・教員の3校合同研修会の実施	・受験する割合が多く保護者の関心が低い項目で、数値を気にする必要はない。 ・現在はよく取り組んでいる。
学校評価	親	学校は、自校の教育活動に関する評価結果とそれに基づく改善策等の情報を提供している。	68.4→80.6→74.6 (1.7→4.5)	肯定的な回答の割合、否定的な回答の割合とも下向きの変化があった。年1回の情報発信に課題があると考えられる。	・教育評価の公開(説明会、ホームページ) ・各行事等でのアンケート実施と結果の発信。 ・学校日より、学力・体力調査の結果の周知、教員の校内研究だより等の発行	・昨年度の反省に基づいた今年度の考察をした方が良い。 ・行事のアンケートのフィードバックをする情報発信をしたほうが良い。
学級経営	親	学校では、子どもが安心・安全な学校生活を送ることができる学級づくりを行っている。	87.0→86.8→84.3 (2.5→2.9)	保護者と児童の評価が逆の結果になっているが、概ね落ち着いた生活を送っていると考えられる。「学校生活全般」の評価結果と合わせて、来年度の取組に改善を図る必要がある。	学校生活全般の取組に準じる。 学校生活のきまりを精選し、年度初めに共通理解をはかり、共通指導を徹底する。	・評価が高く、学校も良く取り組んでいる。
	子	先生は、クラスのみんなが分かり合い、協力し合えるようにしてくれている。	88.8→84.0→87.9 (3.6→1.6)			
個に応じた指導	子	授業では、自分の得意なところを伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、個別に教えてくれている。	60.4→49.5→51.0 (19.7→13.1)	否定的な回答の割合がやや減少した。一人一人に合わせた指導を心掛け、肯定率を伸ばしていけるよう、来年度意識して取り組んでいく必要がある。	・授業中、児童の様子をきめ細かく見取り、一人一人とやり取りをしながら学びを支える時間を設ける。	・授業の中で個別対応や子供どうしの教え合いを進めたい。 ・数値的な学力だけではなく、全人的な個性の伸長に目を向けて子供に伝えられると良い。
学習の成果	親	子どもは、学校の授業を通して、分かることやできることが増えている。	90.7→92.0→88.5 (1.2→0.8)	保護者・児童共に、肯定的な回答の割合がやや減少したが、児童の否定的な回答の割合も減少した。「分かることやできることが無い」という児童が減少してきたことは成果である。様々な場面で「できた・分かった」を実感させたり、保護者に伝えたりしていく必要がある。	・学習指導要領の完全実施となる年である。学年会・専科会を活用して、教材研究や指導法の工夫、評価について共通理解を図ると共に、授業力の向上を目指す。 ・外部人材とも連携し多様な学習経験を重ねることで、児童の「分かる・できる」を広げていく。 ・学年便りやHP、保護者会等で、現在の取組や児童の成長を積極的に伝えていく。	・若干の低下はあるが、高い評価が出ている。このまま取り組んでもらいたい。
	子	学校の授業によって、分かることやできることが増えている。	87.0→85.0→82.3 (5.9→3.8)			
学習評価	親	学校は、子どもの学習状況を適正に評価している。	79.7→85.0→84.9 (2.6→2.3)	肯定的な回答の割合は概ね昨年度と同様である。児童の否定的な回答の割合が減少したことからは、教員が児童へのフィードバックを心掛けていることが分かる。肯定的な回答を増やしていくために、さらに改善を図る必要がある。	・作品やノートへのコメントや、授業中の児童への細やかな声掛けを心掛ける。 ・学年会で評価に関する共通理解を図ったり、フィードバックの方法を共有したりして、指導に生かす評価を丁寧に行うことができるようにしていく。	・学校の情報発信を多増やしていく努力が必要である。 ・否定率が減りよい傾向である。 ・担任による評価はばらつきが出るが、やむを得ないと思う。
	子	先生は、授業で自分ができたことを誉めてくれたり、間違えたところを教えてくれたりしている。	85.4→76.5→78.6 (7.7→2.2)			
ICT機器の活用	親	学校は、ICT機器(電子黒板やデジタル教科書等)を活用した授業を行っている。	75.5→83.8→86.7 (2.8→3.4)	3年間を通じて、保護者の理解は確実に上昇している。また、児童については、高い状態で保っており、本校の日々の実践が評価されている。保護者が学校で授業を参観する機会でのICT活用が実施されていることがうかがえる。この程度の数値が出れば、十分学校の取組を受け入れてもらえていると考える。	・今後も、様々な機会を通じて、ICTを活用した授業を実施する。 ・児童一人一人のタブレットが整備された時は、その活用方法の研修を行い、より充実したICTを活用した授業を実施する。	・数値は良好である。 ・授業のほかにも委員会等での活用があり取組も良好である。
	子	先生は、授業において電子黒板やデジタル教科書を活用している。	96.0→94.5→96.3 (2.4→0.6)			
系統的・連続的指導	子	先生は、今の授業で学習していることが、前の授業や今後の授業とどのようにつながっているか、教えてくれている。	79.2→79.9→80.8 (4.7→3.3)	肯定的な回答の割合が微増し、8割を超えた。既習事項や前学年とのつながりを意識させるような声掛けを引き続き心がけていく必要がある。	・各教科で学習内容の系統や教科間の関連を確認し、学年・学校間の連続性も意識して指導を行う。 ・東京ベーシックドリルを活用する。	・数値が上がっている。 ・授業等で学習内容のつながりについて説明されている成果である。
道徳教育	親	子どもは、学校での生活を通して、他者と共によりよく生きるための力が育まれている。	83.5→90.1→86.7 (2.0→2.4)	保護者の多くは、他者と共によりよく生きるための力が育まれている実感をもっている。しかし、どう育まれているのか分かりにくいと感じていることが、数値に表れている。児童は、昨年度同様の結果となっている。道徳の授業で児童がより主体的に考えたり、活動したりできるように指導力の向上をめざすことが必要である。	・教員の指導する道徳的価値の理解を深め、効果的な授業展開を模索していく。 ・道徳授業地区公開講座等で外部講師を招聘し、様々な道徳的価値に触れるようにする。 ・授業だけでなく、学校生活で起こることや様々な機会を使って指導する意識を教職員全員でもっていく。	・公開の参観者が少なく理解されていない。 ・道徳の評価は難しい、引き続き努力して欲しい。
	子	道徳の時間では、友達や家族、地域の人たちと共によりよく生きることの大切さについて、みんなで話し合っている。	77.2→72.6→73.1 (9.2→5.8)			
体育・健康教育	親	子どもは、学校での生活を通して、体力や食、生活習慣をはじめ健康な生活を送る力が育まれている。	89.2→92.5→88.5 (0.8→1.4)	大きな変化ではないと考える。体育にかかわる取組が児童に定着し、大半の保護者にも理解していただけていると考える。子供たちが健やかな生活を送るために、これからは具体的な場面を示して授業や学級の時間、給食の時間等で指導を続けていく必要がある。	・長縄週間や持久走週間の設定、長縄グランプリへの参加等の取組を継続する。 ・体育授業での児童の運動量確保にも留意した指導を行う。 ・オリンピック・パラリンピックの開催年度として、掲示や体育委員会の取組で機運を高めていく。 ・養護教諭による保健指導、栄養士による食育を継続する。	・健康教育への理解を深めていく必要がある。 ・健康教育に関する考察や取組の記述が必要。(加筆済)
	子	先生は、健康な生活を送るために必要なことを教えてくれている。	84.9→77.4→77.4 (7.5→2.2)			
特別支援教育	親	学校は、子どもたちの発達に関する課題など、障害理解を深める情報を提供している。	60.3→69.3→65.6 (3.6→7.8)	理解啓発をするために「ほほえみ便り」を通して情報を発信し、はちなり教室の施設を学校公開日に見学できるようにしてきた。情報提供の機会の拡大や理解を深める方法をさらに探っていくことが必要である。	児童に関する情報を学校と保護者が共有しながら、引き続き「ほほえみ便り」の発行や施設公開をして理解を深められるようにしていく。	・数値は横ばいだが、高い値ではない。親の関心の高さが問題。 ・理解を高めるために「ほほえみ便り」の発行を続けてほしい。
地域との協働	親	学校は、家庭や地域と連携・協力して教育活動を行っている。	80.0→72.8→82.5 (3.6→3.8)	保護者の肯定的な回答が、過去3年間で最高だった。平日に学校公開を開催し、多くの参観があったことが一つの要因である。また、運動会やもちつき大会等の各行事で多くの保護者の協力をいただき実施・成功したことも要因と考える。	・引き続き、平日の学校公開を開催し、保護者・地域の方が本校の教育活動に直接的に触れる機会を設ける。 ・各行事の際、保護者・地域の方の協力・協働をより一層求めていく。 ・外部講師による授業は、年間を通した指導計画に基づき、適切に招聘していく。講師の紹介を丁寧に行い、児童にその存在を十分に理解させる。	・児童には地域と共同している実感がないようである。地域人材の協力体制を児童にもっとアピールする必要がある。
	子	先生は、地域の人たちと協力しながら、授業や学校行事をよりよくしてくれている。	71.0→61.3→60.5 (10.4→9.1)			
いじめ防止	親	学校は、困ったり、悩んだりしたとき、相談にのったり話を聞いてくれたりする。	61.6→82.0→56.4 (3.0→9.9)	児童の肯定率が大幅に上がった。学期に1回のアンケートなどで児童の様子をきめ細かく把握し、学校いじめ防止対策委員会を中心に学年で組織的に対応した成果だと考える。保護者の肯定率が減少し、否定率が増加した。保護者と子供の理解にずれが生じている。保護者の思いを十分に受け止めきれない状況があるものと受け止め、真摯に対応していくことが大切である。	・学校いじめ防止基本方針に基づき、早期発見に努め、学校いじめ対策委員会で組織的に対応をしていく。 ・児童がいじめを深く考え、いじめは絶対に許されないことを自覚するために定期的にいじめに関する授業を行う。 ・学校公開などの機会に感想などのアンケートを取り、保護者の意見を聞く機会を設ける。	・事案が表出しないと関心がなく取組が見えてこない面がある。 ・親子で話題が共有できているかも懸念される。 ・学校としては相談にのってもらっていないという感覚があることを真摯に受け止め、改善を図る努力を期待する。
	子	学校は、困ったり、悩んだりしたとき、相談にのったり話を聞いたりしてくれる。	65.8→60.3→80.3 (11.6→4.2)			
(独自)特色ある学校の取組	親	学校は、宇宙の学校の実施、メダカやスズメシの配布、理科自然園の設置などとして、理科や自然に対する興味・関心を高めるよう努めている。	* → * →84.3 (* →1.6)	CSの意見を取り入れて独自項目として加えた設問である。保護者・児童とも比較的高い肯定的な回答を得ている。「宇宙の学校」の参加で、調査にかかわる5年生と6年生で少なく、特に6年生は1名という点が回答の背景にあると推測できる。また、全児童に関わる取組が少ないことも課題と考える。	新学習指導要領の本格的実施をふまえて、学校の担う役割を検討し、理科教育の推進を柱とした教育活動の再構築を図る。 2030年に向けて大きく変化する世界を生きる力の育成を、新たな「特色ある学校づくり」と設定し、取り組んでいく。	・設定した80%の肯定率を越えたのは評価に値する。 ・理科から環境(SDGs)等への広がりを期待したい。
子	先生たちは、宇宙の学校を行ったり、メダカやスズメシを配ったり、ハスの植え付けをしたりして、理科や自然に対する興味や関心を高めてくれている。	* → * →72.1 (* →5.9)				
(独自)学校経営計画の推進	親	教職員は、①心を磨き耕す、②ルールを尊重し守る、③人との関係を大切にするという3つの学校経営基本方針に基づいた教師像の実現に向けて努力している。	* → * →64.3 (* →4.9)	否定的な回答を上回る8%の回答不能があり、保護者には見えにくい内容の設問であったが、肯定率・否定率を真摯に受け止め、経営方針の実現に向けて努力するとともに、情報発信に詰める必要がある。	・職員会議等での校長講話の充実 ・様々な啓発情報の回覧 ・平日学校公開等を柱に、地域や保護者に開かれた学校づくりを行なう。	・教員の努力は保護者からは見えにくく、評価しにくい項目である。 ・さらに地域・保護者に開かれた学校経営を進めてほしい。